

古代王権論再構築への新たな提起

石上英一

義江明子氏は、『日本古代の氏の構造』（一九八六年）・『日本古代系譜様式論』（二〇〇〇年）・『日本古代女性史論』（二〇〇七年）等により、古代女性史研究の新分野開拓、ジェンダー史研究構築を進めてきた。受賞作『日本古代女帝論』は、六世紀末から八世紀後期（五九三〜七七〇年）の大王・天皇十五代十三人のうち八代六人（推古、皇極・斉明、持統、元明、元正、孝謙・称徳）が女性であった事実について、双系制社会構造論の上に、女帝の即位過程と権力構造の具体的分析を行い、古代王権史の再構築を提起する。Ⅰ「古代女帝論の意義」のⅠ「古代女帝論の軌跡」、Ⅱ「日本古代の女帝」のⅠ「王権史の中の古代女帝」は、古代王権史・女帝研究史を総括し、女帝論を研究課題として明示する新稿である。著者はさらにⅡで、持統天皇・元明天皇・孝謙（称徳）天皇等の皇位継承・即位過程と権

力を具体的に分析し、七世紀末から八世紀中葉の女性の大王・天皇の歴史的位置についての提示を行う。著者は、『古代王権論——神話・歴史感覚・ジェンダー』（二〇一一年）の第四章「女帝」に、八代六人の女性の大王・天皇について研究の概要を提示しており、本書はそれを精述したものとなっている。Ⅲ「古代社会のジェンダー編成」は双系制社会における女性の社会的活動、Ⅳ「系譜論と女帝論の接点」は女帝論の基礎となる系譜様式論についての著者の最近の研究を提示したもので、著者の双系制社会構造論への理解を深めさせてくれる。

また本書は、明治維新後の天皇制の中で創成され、かつ戦後の象徴天皇制の展開の過程において変成された古代女帝像について、「聖俗二元論」、「巫女論」、「中継ぎ論」が成立しないことを論じ、近現代日本国家論への古代史研究からの提言を行っている。

義江氏には、さらに天皇号成立時期についての自説の再提言、後の政を掌る皇后の天皇制における位置など、ジェンダー史の視点からの更なる研究を期待したい。本書は、日本史学界での、双系制社会構造論・天皇制論についての議論展開の一契機ともなる問題提起の書であらう。